
星が生まれた日

霧谷香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星が生まれた日

【Zコード】

Z9943A

【作者名】

霧谷香住

【あらすじ】

物心つく前に父親を亡くした綾。成長し、その時には分からなかつた、母親が流した涙の意味が分かる瞬間がやつてきた。

小さい頃、母に「いつかこた。

「ねえ、何でうさこはお父さんがいないの？」

すると、母は悲しそうな顔をして微笑んで、口を開いた。

「お父さんはね、お空にいるの。お空のお星様になつて、いつも綾のこと見守ってくれてるんだよ」
そう言つて、星空を指差した。

「ふーん」

その時は、小さかつたからそつ言われたけど、本当は、父は私が生まれてすぐに事故で亡くなつたらしく。

そんなことは全く知らずに、私は夜空に輝く星を見て母に言つた。

「お星様、きれいね。お父さん、とってもきれいね」
母は、それをきいて、涙を流していた。

その理由は、分からなかつた。

でも、その時の私は、人が死ぬこととか、命の重さなんて、知らないようなものだつたから、手を伸ばしても届かない夜空に行くことができて、そこで光輝く星になれた父を、とても羨ましく思つていた。

十数年経つた今、あの時泣いていた母の気持ちが分かる瞬間がきた。

母が、死んだのだ。

もともと身体が弱くて、一、二年前から入退院を繰り返していた。それが、半年前から医師に退院の目処が立たないと言われ、病院に入り浸りの生活になった。そして、昨日、私の仕事場に母が急変したと連絡が入り、病院に向かったら、母が息を引き取った後だった。

悲しみに暮れる前に、私には、やることがあった。母の死を親戚に伝えなければならないのだ。

そして、葬儀の準備など、やらなければならぬことが、たくさんあった。

喪主は私だつた。

今まで、法事は何回かあつたけど、葬儀なんて初めてだつたから、何をしたらいいかよく分からなくて、叔母夫婦に色々と手伝つてもらいながら準備をした。

通夜には、今まで交流のあつた父の兄弟の家族などの親戚や母が働いていた時の同じ職場の人参列した。

それもまた、私は弔問客への対応があつて、精一杯の状態だつた。通夜が終わり、弔問客は帰つて行つた。親戚で葬儀屋の用意してあつた寿司を悩み、その後暫くして父の兄弟の家族、母の兄弟の家族も帰つて行つた。

「じゃあ、明日、私達は早く帰るからね」

帰りぎわに斎場の出入口のところで叔母がやつぱつた。

「綾ちゃん、大変だな」「えをしつかりね」

「はい。おやすみなさい」

私は、軽く会釈をして、叔母夫婦を見送った。

疲れた…。本当に疲れた。息をつくと、十一畳の空氣の中へ広がった。

寒さが身に染みて、腕をわすつた。

ふと、夜空を見上げると、今夜は晴れていて、星が夜空に広がっていた。

その瞬く星たちを見て、小さこ頭のことを想い出した。

年を重ねるにつれて、昔、母が言つていたことは、小さな子供に父親が死んだということをストレートに伝えないための言こと回しながら思うようになつた。あれは、本当のことじやないんだ、と…。

でもなぜか今は、違つていた。

あの星空の中へ、母はいるのだろうかと、やう考へている自分がいる。

そして、何の意識もないのに、涙が溢れた。上に向いていっているといひのと、涙はじぶれて頬を伝つた。

あの時の、母の涙の理由が分かつた気がした。きっと、今の私のこの涙と同じだ。

もし、本当に死んだ人が星になるのだといふのなら、あの星の輝きは、なんて寂しいものなんだろう。

いくら綺麗に輝いていても、それはなんて悲しいものなんだろう。手の届かない夜空に行けるといふことは、もう会えないといふに行ってしまうということだ。

大切な人が死ぬということは、そういうことなんだ。言い様のない感情込み上げて、募っていく。

母も、父が居なくなつた時、こういう思いをしたに違いない。私は、覚えていないから、母は、一人で抱えていたんだろうか……。

「お母さん……」

私は、夜空に向かつて呼び掛けた。

産んでくれて、ありがとう。

たつた一人で、寂しかつたのに、たつた一人で、私を今まで育ててくれて、ありがとう。

私、やつと一人で働くよになつたのに、お母さんに何も返せないままで、ごめんね……。

「…が、お母さんが死んだその瞬間に、夜空に新しい星が生まれ
ていってくれますよ！」

そして、それは、お父さんのそばでありますよ！」

お母さん…

「…か…夜空で、綺麗に輝いてござるだぞ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9943a/>

星が生まれた日

2010年10月26日03時26分発行